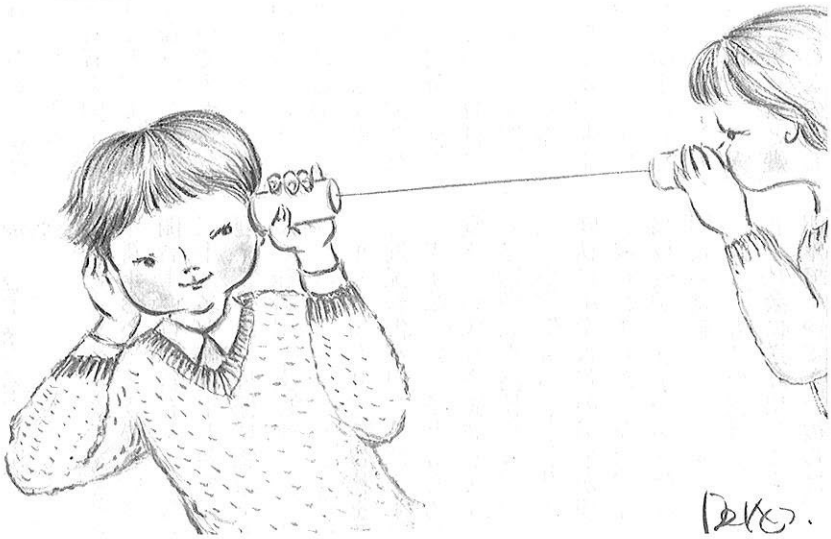
光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349―11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480―72―3883
振替／00130 ― 1 ― 128022
印刷／社会福祉法人 共愛会



モシモシ…
あけまして
おめでとう

絵・中島　英子

新しいいのち
（ローマの信徒への手紙）

理事長　福島　勲

ウクライナでは十九世紀末まで、ヴェルテップと呼ばれる人形芝居があった・（江川卓著、ドストエフスキー）

この人形芝居は二段になっていて、上段ではイエス・キリストの降誕を、下段ではあのあくどいヘロデ王が、二歳以下の男の子を殺している場面を演じる。

ビザンチンのイコンにイエスが岩穴で誕生したという絵があり、これに基づいて、人形芝居がヴェルテップ（岩穴・巣窟の意）と名付けられた。

江川氏の所論は、ドストエフスキーの作品にはこの二段構造の様式が取り入れられている、というのである。

このように指摘されると、罪と罰やカラマーゾフの兄弟などに描かれる、聖と俗との絡みあった人間の姿が頷かれる。

「元日や昨日の鬼が礼に来る」誰の作か知らないが古い川柳である。

今はほとんど見られない光景だが、大晦日まで激しく取り立てした借金取りが、元旦には揉み手などして年始回りに来る。

たてまえと本音、表と裏の違い。この川柳など序の口だが、自ら省みて、善悪、愛憎、聖俗の捻れ交錯する自分にどうしようもない恥辱と絶望を感じる。

教会の礼拝に出て敬虔な思いに浸されることは偽りではない。

しかし、一旦教会の門を出て歩み出すと、世俗の世界に戻り思うこと行うこと、全て恥ずべく、おぞましい限りである。

み言葉を聞きこれに従わんとする生活は、ほんの僅かな聖なる思いを増幅して、幾倍かの聖なる姿に昇華しなければならない至難の業である。

教会は二重人格者をつくる所だと言った、旧約学の大家の先生の説教を聞いたことがある。

まさしく聖たらんことを望むわれわれは二重人格であると言えよう。

しかし教会がつくるというこ

とは、教会は厳しくわれわれに自分が二重人格者であることを意識させるということである。

モンテーニュは自著を国王に献呈して誉められると、では陛下、私も御意にかなうでしょうね、著書と私は一つですから、と言ったとか。

これは皇帝に向かって言えても神に言える言葉ではない。

内心神に仕えようと志すが、肉の五体は罪の法則に支配される。いともあわれな自分、何と惨めな人間だろうとパウロは嘆き悶える（ロマ・七・二十四）

ユダは銀三十枚でイエスを売った。二重人格の典型だが、非を悔いて自力でこの二重を一重にしようとした。だが結果は首をくくることになった。

時が進み、年が改まっても人間の新しさはない。新、新と幾度か新を用いてもまことの新しさは産まれない。このようなことにコヘレトは「太陽の下、新しいものは何ひとつない」（一・九）と断言する。

キリスト・イエスの救いにあずかってのみ、次元の異る新しいいのちが与えられるのである。

育ち合い

施設長　今関　公雄

新年おめでとうございます。開設十度目の新春を子どもたち二十九名と職員十七名で元気に迎えました。皆様に感謝をもってご報告申し上げます。

年頭に当たり、年賀状を兼ねて近況報告を申し上げます。

先ず第一に、子どもたちの目覚ましい成長を確認します。その年齢構成も高校生五、中学生八、小学生十六、となりました。昨秋に小学六年の男子が親に引き取られました。なお、今春の高校受験に女子一名が臨み、四回目の挑戦となります

何よりもこの三月で卒業生二名を社会に送り出します。小学四年でやってきた彼らは、光の子どもの家の長男の役割を九年間にわたって担い、いよいよ就職により実社会へ巣立ちます。

次に、昨年四月より自活訓練事業の養育形態として「旗井の家」を設置し、初めての新春を迎えたことも特記されます。

これは地域社会の中に生まれた普通の家庭（グループホーム）で、いわば分家に当たります。したがって、本家の原田、佐藤、仙道の各家と併せて四軒で新年を迎えました。

ところで開設十年目の新春を迎え改めて私たちの仕事の意義を思います。

ある時、母が入所中の子どもを訪ねました。離婚により情緒不安であったことと、人格の未成熟により「生みの親」であっても「育ての親」になれていないことを直感しました。子どもたちと一緒に生活し、お正月やお盆などには子どもを連れて帰省するなどを重ねました。この間、この母の生育歴を東北の郷里で知ることになり、その不遇な子供時代に涙しつつ暗澹たる思いに捕らわれたものです。もし、自分が同じ境遇であったならばと思わせられたものです。

先の取り組みをねばり強く続ける中で大きな発見をしました。それは当初、A子さんだけのお母さんであった子どもたちとの関係が、私たちのおばさんにまで育っていった事です。あわせて育ての親に成熟を見たこの母の元へA子は引き取られました。

又、昔から「女は弱し、されど母親は強し」と言われますが、最近ではこの母親と「保母」を置き換えることが出来るように思われます。ことに光の子どもの家での担当制では、開設当初の子どもとは九年半の起居寝食を共にする中でこの例えが実感されます。よく、お世話や指導が大変ですねと言われますが、実際は子どもたちに支えられ、育てられていると考えても過言ではありません。つまり、このことは、共に生活するなかで共に育ち合うことを意味します。ここでの保母の強さです。

地域社会においても、光の子どもの家が媒介項となり、いと小さきものを包含する「育ち合い」が見られることは誠に幸いなことです。

本年も又、このような育ち合いを大切にして歩みたいと願います。祝福を祈りあげます。

エッセイ

六茶庵五戒

県立高校美術教諭　中島　睦雄

昨年の十二月の或る日、私は大変恥ずかしい事をしてしまった。後悔している。

いつものように美術の授業の始まるチャイムが鳴って五・六分もたっているのに、或るクラスの生徒が十人ほど、美術教室へ来ないのである。普通、美術や音楽というのは、美術教室に生徒がやってきて授業が行われるので、教師は準備をして待っていれば良いのである。ところが、前の授業が体育だったりすると、着替えをしたり何やかや細々とした事があって、多少遅れてくる事はあり得る。これは、たまには仕方のない事だと思う。だから、こんな時は忍耐強くこちらも待てる。そこへ大急ぎで生徒がかけ込んできて「すみません、着替えをしていて遅れました」とか何とか理由を言ってくるものだ。そういう態度や言葉は、かえって清々しく思えていかにも若者らしい。

だが、その日のその時は、そんなのとは全く違うのだった。前の時間は体育でもなく、他の行事でもない。それなのに来ない生徒がいるのである。遠くからその教室を眺めてみると、ただ何となくたむろしている様に私には見えたのだ。私は、来ない生徒を迎えに行く事にした。スタスタと廊下を急いで行くと「どうしたんですか？」と若い先生が、私に真顔で問いかけた。いつもと少し様子が違うと思ったらしいのである。「えっ、何だか生徒が来ないもんだから、一声吠えてきます。」と私は言って、生徒たちのたむろしている教室の引き戸を引いた。

「ナニシテルンダ！ボケットシテルンジャナイ！」大声コンクールがあったら優勝しそうな大声で、私は吠えたてた。生徒達はライオンに襲われた小兎の様に、一斉に後ろの出口から廊下に飛び出した。そして、階段の方になだれ込んで行った。慌てふためいた生徒たちの中には、肝心な授業の道具を何も持たずに行ってしまった者もいるという有り様であった。私は、少し後から美術教室に入って行った。「出席をとります。」まだブッキラボウで荒々しい調子だった。

それでも授業の方は、何とかいつものように笑顔で終わらせることが出来たのだが、準備室へ帰ってきてから後悔していた。

何という事だろう。あの時の私のあの言葉。そして態度。荒々しい形相。自分で自分が嫌になっていた。生徒達は、何か重要な話をしていたのかも知れないのに。理由は何であれ遅れる事はいけない、というのは余りにも無茶な事だったろう。私は、思わず大きなため息をもらした。

準備室の壁、私の目の前には、一枚の紙が画鋲で止めてある。これには「六茶庵五戒」と書いてある。「むっさんに五つのいましめ」と読む。むっさんとは私の事である。つまり、私が私に与えた五つの戒めなのである。

第一項　言葉を慎むこと。

（えへらえへらむだ口をたたいたり、荒々しい言葉で人を傷つけている自分）と、こうなのである。ところが、これを書いて何日もたたないうちに第一項を完全に破る結果になってしまった。情けない事だ。私は、ぼんやりと椅子に腰を下ろしていた。最初から守れそうもない戒めなど作らない方が良いのかも知れない。

第二項はどうか。行いを悔やむこと。

第三項　食を貪らないこと。

これなども大変難しい。際限もなく飲みたがり、際限もなく食べたがるからだ。

第四項　人に誠実である事。

第五項　自分に誠実である事。

どれもこれも大変だ。そもそも半分冗談で半分本気で作ったものだが。それでも最後に平成六年十二月、自分の生活を反省しこれを記して自戒とする、と書かれている。考えてみれば、厄介なものを作ったものだ。守れそうもない。この調子で何日もたったとして、いよいよ苦しくなった時には、あらためて別な戒めの一項をつけ加えなくてはならないのかも知れない。

第六項　自戒自戒とやたらに自分を縛らない事。とか何とか。

学者もどきのつぶやき(13)

『心優しき隣人たちとともに』

山形大学医学部教授　仙道　富士郎

早いもので札幌から山形に移り住んで二十年にもなった。

年を重ねるごとに一年は短くなるとよく言われるが、まさに実感である。何ということはなしに二十年が過ぎてしまった。

それにしても途中のことはほぼ忘れてしまったと言った方が早いが、山形に到着したばかりの頃のことはよく覚えている。

子ども五人ということで大学の官舎では狭すぎるので家を一軒求めた。いや、より正確に言わねばなるまい。秋田で開業医をしている兄に買い求めてもらったのである。しかも、子ども五人ではその家屋が手狭だろうと言うことで、車庫の上に二階を増築してくれた。

私の現在所属している教室は免疫学・寄生虫学講座と言うが、まさに寄生虫的な存在の私ではある。

近所の人たちとのつきあいは、私たちが山形に到着する以前から始まっていたと言えば妙な話だが、事実そうなのである。

秋田から来て二階を増築していた大工さんたちから後になって聞いたのだが、昼食を庭先で食べているのを見かねて、近所で食料品店を営んでいるKさんの奥さんが自宅で食事をすることをすすめてくれ、みそ汁まで作ってくれたことから、近所つき合いがもう既に始まっていたと言える。

このことを最初として、私たちはKさんの家族から計り知れない恩恵をこの二十年間受けることになる。

何としても忘れることが出来ないのは十一年前、私が教授に昇進したとき、Kさんの奥さんが呼びかけ人になって近所の人たちが祝賀会を開いてくれたことである。このときはこの会だけが唯一の祝賀会であったので、特に印象が深いのだと思うが、町内会で教授就任祝をしてもらったのは私だけではあるまいか。

三人の奥さんたちがおめでたい謡に合わせて舞ってくれたのを覚えている。このような近所つき合いは、外から山形にやってきて住み着いた人たちには少し奇異に映るらしい。

過日、長男の結婚祝いのパーティを近所に開設された公民館で行った。

その時も、市役所にお勤めのKさんにずいぶんとお骨折りをいただき、公民館のこけら落としみたいな形になってしまったが、近所の人たちを多くお招きできた。

司会をお願いしたテニス仲間の、元NHK女性アナウンサーの感想は、「仙道先生は、お近所つき合いが多くておもしろいわね。」というもので、おもしろいとは奇異と解釈してもかまわないだろう。

私たちは何かことがあると、いやことがなくてもKさん宅に集まっては酒を飲んでいたが、Kさんの奥さんは「それでは」と、スナックを開いてしまった。彼女の心やさしさの故と思われるのだが、いつも満員な「みち」（Kさんの奥さんの名前）では、とても想像もつかないおもしろい話を聞くことが出来る。

ある日、めずらしくお店でお客になって飲んでいたKさんがとなりの客と何かブツブツと話をしている。

要約すると、次のようである。

過ぐる日、その客である男が結婚をすることになった。

ところが、結婚式当日になって準主客のひとりが事故で披露宴に出席できないことになった。男はとっさにものを頼んだら断れないKさんの顔を思いつき、Kさん宅に飛び込んだ。

誰でもそうだと思うが、ややしぶったKさんは、奥さんの「困ったときはお互いさまでしょ。」の言葉に急かされて礼服に手を通したのである、という。男はかなり呂律の回らなくなった言葉で、Kさんにお礼とお詫びを申し立てているのであった。

トムソーヤたちの朝 3

日本キリスト教団東大宮教会　永野三恵

迎春。

新年を教会学校の子どもたちとともに合同礼拝によって迎え、聖餐の恵みにあずかることが出来るこの元旦は、何とすばらしい一年の幕開けであろうか。

心新たな思いで、神に祈らずにはいられない。

「わが家の、わが教会の、この地域の、日本の、また戦争の残酷さの中におびえ逃げまどう子どもたち、生きる権利を奪われている世界の子どもたちに、心のやすらぎと生きる希望と、人を愛し愛される喜びを、荒廃しきってしまった魂に生命の水を与えて下さい」と・・。

昨年は、何と多くの子どもたちのうめき声が聞こえてきたことであろう。

新聞を開くごとに、テレビも痛ましい事件を伝えていた。

今まであちらこちらで、ふたをされていた子どもたちのうめき声が、声として出てきた。

その事は、家庭に、学校に地域に、社会問題として考えていく大きな役割を果たした事になる。

子どもたちの姿には、必ず大人の姿が反映されている。ひとりひとりの大人が、襟を正して、自分の生き方を省み、何を大切にしているのか、何が価値あるものかを、子どもたちに伝える者でなくてはならない。物質的なものではなく、目に見えないものこそ生きることを豊かにするものであると、あらゆる機会を通して伝えていきたい。

だからこそ、教会学校、教会で語られる神のみ言葉によって生きる確かさと、安らかさが一層強く思われる。

今年も主の祝福が奉仕する教師に、豊かに注がれますよう。

教会学校教師の奉仕と共に、私が大切にしているものがもう一つある。

それは地域のお母さんたち三十人の協力を得て開いている「アスナロ文庫」の活動である。

これは活字離れの激しい今の子どもたちに、一冊でも魅力ある絵本・本と出会ってもらいたい、手渡したいとの思いをもって、地域の中で始めた文庫である。

何よりも、三十人ものお母さんたちの協力が心強い。

週二回（水・土）に文庫は開設され、本の貸し出しと共に、お話、読み聞かせの時間を設け、子どもたちが楽しんで行ってくれる。

しかし、文庫でただ待っているだけでは、子どもたちをとらえることは出来ない。

まず、子どもたちの心を掴む行事を企画する。人形劇の上演、お話会の開催、絵本と結びつけるお料理の会をする、手を使う工作をする、また講師を招いての講演会、それと共に地道に読書会を開いて、本のおもしろさ、楽しさを知ってもらおうと、あの手この手の行事に子どもたちを巻き込んでいく。

そんな事を通して、子どもたちは文庫につながり、着実に本を読み育っていく。そうした子どもたちの姿を見るのは何より嬉しい。

この頃では、子どもたちの集まっている所にはどこでも出ていく。小学校の授業時間をもらって、お話。本の読み聞かせをする。もっと小さい時期から本の楽しさを知ってもらいたいと、児童センターや母親の子育ての小さなグループにも行って、赤ちゃんの絵本を読んでくる。まずは、お母さんに絵本のおもしろさを知ってもらいたいからだ。

この文庫の活動も、私のなかでは目に見えないものを育てていく大切な働きとして、教会学校の働きと結びついている。

想像力が豊かに養われている子どもたちは、人の痛みも、人間の弱さも小ささも解り、更に大いなるものの存在にも心をかたむけることが出来るだろうと確信してる。

新しいこの一年、三十人の光の子どもの家のトムソーヤたちが、また力強くしっかりと歩んでいって欲しいと願っている。

おめでとう

あけましておめでとうございます。
光の子どもの家で10回目の新年を迎えることができました。
皆様のお支えとお祈りにおこここまでこれたことを思い感謝で一杯です。
この一年も子どもたちと共々に頑張りたいと思っております。
今後ともご指導宜しくお願い申し上げます。皆様のご健康をお祈り申し上げます。　田中郁夫

明けましておめでとうございます。
皆様の心温かいお支えによりまた新し年を迎えることができました。
子どももおとなも心が「安ぎのある家」になれるように心つくそうと思っています。
今年もよろしくお願いします。皆様も神様の恵あふれる年であります ように お祈りしています。
宍水祐子

明けましておめでとうございます
心の揺れ動く思春期まっただ中の子どもたちが大半を占める「家」となりました。
目の奥にキラッとしたかがやきをもてる、ひとりひとりにとっての「家」としてありたいと思っています。
今年もどうぞよろしくお願い致します　竹花信恵

1995　1995

あけまして

新年明けましておめでとうございます
昨年中は暖かいご支援を頂きありがとうございました。
おかげ様で暖かいお部屋で子ども達と共にお正月を迎えることも出来ました。次々と新しい子ども達の成長を喜ばしく思っております。
よろしくご指導願います。　鈴木清美

新年あけましておめでとうございます。
昨年はいろいろお世話になりました。今年もより一層の努力をしていきます。
よろしくお願い致します。　中村一男

新年あけましておめでとうございます。昨年に於きまして物心両面からお支えいただきましてありがとうございました。
心より感謝申し上げます。
ここでの働きも3年目になります。
この一年、子供と向き合い、"共感"し合える生活を創っていきたいと思います。この一年、皆様からの心に添えるよう、努力していきたいと思います。　鈴木由紀子

新年　明けましておめでとうございます。
皆様のお支えにより
この家のお正月も早
10回目となりました。
子どもたちの成長になかなか追いつけない私です。
この一年も御指導よろしくお願いします。　岩崎和子

1995　1995

河のほとりで

旗井の家

新年のご挨拶と皆様の上に豊かな祝福を祈りあげます。、これまでのお励ましを心から感謝し、本年もよろしくお願いいたします。

十一月中旬から、担当する五人の子どもたちとの地域での生活が始まりました。私の担当する子どもたちは高二の睦男を除けば乳幼児期からやってきた〈家庭〉で生活をした経験のほとんどない者たちばかりです。ですから急に決まったグループホームへの引っ越しは不安だらけのようで喜んでいたのは私だけでした。

アパートの第一日。男の子たちは朝食が終わると早速本家へ遊びに。女の子たちはやることが見つけられず家の中や周りをウロウロ。

そして二日目。「勇、雨戸閉めて。」「うん。」「何やってるの、早く。」「雨戸ってどれ？どうやるの？」雨戸を彼は知らなかったのです。確かに本家にも雨戸はなく、生まれて初めて目にし耳にする物だったのです。その他、インターホン、セールスマンなど彼らにとっての初体験は数え切れないほどありました。

そして、一ヶ月が過ぎようとしている今、まだ本家の仲間が恋しい彼らは暇さえあれば本家へ遊びに行きます。しかしアパートでの生活も満更ではない・・と思えるようになりつつあることも確かです。集団が小さくなり、私自身も子どもたちとの生活を楽しみ、ゆとりのようなものを感じています。そして、他の職員が側にいないことで、子どもたち一人一人への責任がこれまでよりもずしりと重さを実感し、そのことが私と子どもたちの距離を狭め、ぐ～んと近くなったように思います。それが原因かよく分かりませんが、それまで毎晩だった五年生の亜季の夜尿がピタッとなくなりました。

始まったばかりの生活です。不安いっぱいで引っ越してきた子どもたちが、心豊かな関係を楽しみ、『ここに来てよかった』と思えるような『家族』になれるよう励みます。　倉沢　智子

原田家日記

神田　幸枝

明けましておめでとうございます。この年のお励ましを感謝します。本年も相変わらずよろしくお願いいたします。

関東平野の北部の冬が今年もやってくる。もう十二月半ば。去年よりは暖かい、と、子どもたちはいう。

昼間は暖かい日差しの日が多く、夜は、人工の明かりが少ないため、星空の輝きが素敵です。神さまのお造りになった自然に向かうとき、心から感謝の思いがしみ出てくるようだ。そんななかで、保母として初めてこの家のクリスマスを迎えようとしている。

クリスマス。大いなる喜びの日を迎える準備をしているというのに、さまざまなやらなければならないことどもに取り込まれ、心が奪われてしまう。「あれをしなさい」「これはどうしたの！」と、子どものマイナスに目がさとくなり、不満の表現が多くなっていく。鏡に映る自分の顔がヤケに尖って見え、イヤになる。

一晩寝てきちんと食事をすれば体は元気になる。しかし心は誰も、何によっても元気にしてくれはしない。イヤになってしまう自分と別れるわけにもいかないのだ。何とかしなければ、と自分にむち打ってがんばるのだが、また同じ繰り返しになっている。そんな悪循環のなかで一日が終わってしまうこともしばしばだ。

そんな夜、聖書を開いてむさぼり読む。「私はあなたがたに平安を残します。私はあなたがたに、私の平安を与えます。私があなたがたに与えるのは、世が与えるものとは違います。心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ・十四・二十七）

肩から力がすっと抜け、隣で寝ている子どもの顔が愛らしい。

悩みの多さでは私など比べようもないほど全身に受けているこの小さな子どもたちにこそ、イエス様の愛を、クリスマスの喜びを伝えなければ、と、新しい力と勇気が与えられるのを感じる。

子どもたちの季節

仙道家

謹賀新年。本年も昨年と変わらず、よろしくお願いします。

旗井のアパートで展開していたグループホームの担当が、十一月初旬の連休に急遽、仙道家の倉沢グループがアパートに移り、佐藤家にアパートから岩崎グループがもどり、そして私が五名の担当ごと仙道家にやってきて、仙道家は鈴木グループの四人とで九人の子どもたちで生活をすることになりました。その内の七人が小学生で、高校生の逸郎は「チビばっかり」と、不満だろうと思います。

慌ただしい引っ越しの最中に鈴木由紀子保母は、おいしいゼリーのデザートを作って夕食のテーブルをとても豊かにしてくれました。

ごった返す中での心遣いだったのでとても嬉しく、ここで始まる暮らしの仲間として歓迎されたのを実感しました。

こうした思いやりの中で始まったのですが、仲々なじめず、特に長いこと佐藤家で暮らしてきた逸郎、幸司、環などは仙道家を『自分の家』にするには居心持ちの悪い十日ほどが必要だったようです。

それでも、三年生の環は、小学二年の信一や小学二年の詩美とワイワイ遊び、ケンカも派手にやるようになりました。

そんなある日、お風呂が何ともキャーキャー騒がしい。しばらくすると、「チビばっかりで！」といっていた逸郎の声がするではありませんか！。無口で内向的な思春期まっただ中の逸郎が、何と！小学二年生の信一とお風呂にはいって遊んであげていたのです。

以前に佐藤家で一緒だった小学六年生の将司と中学二年の幸司は夜遅くまでゲームボーイに夢中の日々になりました。

家が変わるということは大人でも大変です。そんな大変さをこんな形で乗り越える子どもたちに負けないで、由紀子さんが最初の日に示してくれた思いやりを仙道家の特性にし、何よりも、ホッとする暖かい仙道家をつくっていこうと思っています。　池田　祐子

光の中で

佐藤家

明けましておめでとうございます。これまでたくさんお世話になりました。本年もよろしくお願いします。

夏の終わり頃から体型が気になっていた愛犬のコロが十一月の半ばの寒い雨の夜の後どうも具合が悪そうで、日頃お世話になりっぱなしの加須市の中村動物病院にいく。先生は一目診るなり、「これはひどい肥満だ」といわれ風邪薬をいただいて帰った。

コロが大好きで獣医になりたいという光子も肥満が目立つようになり、元来体を動かすことが苦手な方で、これ以上は・・、と心配していた。昼食時ひとしきり話題になり、菅原先生が、「ご褒美を約束して光子にコロの散歩をしてもらうといい。光子もコロもストレス解消とシェープアップの一石二鳥か三鳥になるぞ」と言った。

この提案をいただき、光子にコロの散歩をしてくれたらシール一枚、シール三十枚でごひいきの歌手のCDをあげる約束をした。

光子はCD獲得をめざしコロの散歩に励みだした。なんぼ犬でも散歩のイヤな日だってある。お構いなしにコロを引きずり出し、たまには鎖からはずれて逃げ出す始末もしばしば。これを追いかける光子を見て、「うまくいった！」と私はにんまり。逃げる犬と光子の勝負は最初からついているが、憶病なコロは決まって家の玄関に逃げ込む。捕まると大変、全身怒りの光子は激しく打ち、その上蹴るなど修羅場です。感情が激すると誰でも乱暴になるが、光子はこれがスゴイ。何度も、どんなになっても人を叩いたり、八つ当たりしてはいけないことは言い聞かせてきた。なかなか思いを伝えることのへたくそな私。これが私の課題なのだ、とつくづく思う。

欲しいCDを手に入れた光子はもう次のCDめざして今日もコロと格闘している。光子の手に何枚のCDがわたれば、当面のコロと光子と私の課題は克服されるのだろう。　坂巻　照子（旧姓石毛）

現場から

幸せであるように Ⅳ

白石　輝雄

明けましておめでとうございます。子どもたち共々、健康で新年を迎えることが出来ました。皆様の暖かいご支援を心から感謝します。

音を立てて成長する子どもたち、悩み、揺れ動き、立ちすくんでしまう思い・・。そんなありのままをこの欄で表現できるとよいのですが・・。

前回は悟の就職が決まるまでのことを報告しました。悟とほぼ同じ頃、同じ学年の小学生として、この家に来てから、ずーと光の子どもの家の「長男」であり続けたもうひとりの高校三年生、昭一がいます。

彼は福祉施設の指導員をめざし専門学校へいくと、大きな夢を語っていたそんな日々に「現実」がぶつっかっていきます。

学費も生活費も肩代わりしてくれる新聞奨学生の道も探しましたが、実習の期間の確保、高額の入学金などの問題があり、この不況という事情も重なり困難が迫りました。何よりも、強い意志がないとやれないという現実が最も大きな課題になります。そんな状況のなかで、希望をかけていた最後の新聞社からは「残念ながら・・。」と通知。

ほとんど時を同じくして就職内定の通知が悟に。そんなこんなで、取り残された思いがしたのでしょう。不安が募り、焦り、「どうせ俺は」という投げやりな気分が彼を支配しはじめました。同じように不安定な友人と出会い、彼の混乱は行動に表れます。帰宅時間が遅くなり、弱い心が、下の方、下の方へと傾いていく様子が見えるようでした。当然弟がその影響を受けない訳がありません。この一年は、昭一と交互するように問題を起こしてくれるようになりました。担当保母の眠れない夜が重なり、会議の議題は昭一と彼の弟をめぐる問題に終始しました。

学校とも連絡を取り合い、ひとりひとりが何が出来るかを考え通し、取り組み直しをはじめ、生活場所も目の届く範囲に移しました。学校の教師のご協力を得て進路を就職に切り換え、元々、体力には自信のある働き者の昭一です。すでに二次募集がわずかに残るだけになった頃、それでも考えられる最上の就職先の「内定」を手にしました。

嬉そうに、みんなに内定通知書を見せて回っていました。

そんな喜びも束の間。昭一の誕生日。出会いをみんなで喜び合いたい記念の日に「事件」を起こしてしまいました。父親の一周年記念会も心を集めてしめやかにすませ、兄弟二人支え合って生きていく昭一と弟。その弟と私は思いっきりぶっつかってしまいました。きっかけはほんの些細なことでした。話に耳を貸そうとしないで、なじる態度にエスカレートしてしまい、とうとう彼に何度も抑えた手を挙げてしまったのです。風船が膨らんで割れるような思いだったのかも知れません。泣いて飛び出す弟、抱き抱える担当保母。弟の興奮は治まらず「顔に傷が出来た、どうしてくれる?」と詰め寄ります。それを聞いて、それまでは弟をたしなめていた昭一が見たこともない形相で全身を怒りにして私に向かいます。「俺の弟に何てことをするんだ!」つかみかかる勢いに、止めようとする誰彼・・。大騒動に。

菅原先生が入り、手を挙げたことを反省し、お互いに謝罪し、何とか弟とは治まりました。

しかし、昭一は治まりません。夜遅くまで話し合ってくれた菅原先生に、「弟には俺しかいないし、俺にも弟しかいないじゃん。」とポロポロ泣いた昭一。怒りそのものになって突進する昭一に「お兄ちゃん止めて、私が悪かったんだから、止めて!」と泣き叫んだ弟。

光の子どもの家でめざした家族関係の再構成と強化がこんなに荒々しく、そして鮮やかに表現されたのです。

こんな愚かなことをしでかした私に私が驚いていますが、逃げないで精いっぱいの思いを彼らに伝えることで、このマイナスをプラスに変えることをこれからの課題として励みます。

養護メモ 53

家族 その七 『情緒6』

菅原　哲男

お正月やお盆などに、幼い頃は父に連れられて、中学生ぐらいになると、父に、お前が行って挨拶をして来いと命じられて、何とも多くて自分との関係がどのようなものなのかも判然としないまま、親戚にご挨拶にしばしばあがった。それ以来、親戚とは五十半ばの今日までそれ相当のおつき合い願ってきている。

そのおつき合いの全てが快いものであった訳ではないし、父も母もいない場面での伯父叔母などの下世話な話や噂には辟易したことなど一再ではない。

もちろん全くという意味ではないが、特別一般と異なる性格でも、非常な迷惑をあたり構わずかけた父母ではなかったとしてもである。

去年の元旦に晶は弟と父方実家にご挨拶にいき、弟は三泊するが彼はその日に戻ってきた。

父方の実家には伯父夫婦といとこなどの家族と隣り合わせで祖母夫婦が住んでいる。

祖父母と伯母の関係や、祖母と息子である晶の伯父との関係などが一通りあるのは常と変わらないだろう。彼等が父母と別れた後の数十日ほどを、この実家で過ごし、そこから光の子どもの家に入所してきたのである。それまでに父とその連れ合いが自分の子どもを実家の父母に、可愛いはずの孫を光の子どもの家に入れさせられるに至るまでの、実家や家族へかけた膨大なマイナスとしての迷惑な言動の数々などが、彼らがその実家にいくことによってリアルに想起される。そんなことが複合して、ある種の情緒が醸し出される。その情緒は、形成する条件がマイナスなので、決して快いものになることはない。

帰ってきた晶は、そのころ自立のためにしていた職員宿舎での生活訓練の破れなども引きずっていて、ついにプラモデル売場で万引きをしてしまう。

このことが一カ月ぐらい後に判明し、その売り場に行って謝り代金を支払った。

同じように、コンビニエンスストアで働いている父のもとに帰ってお正月を過ごしてきた将太は友だちのバイクを乗り回し、友だちの父がそれを見つけて連絡してくれて事なきを得たが、そのことから喫煙の事実などが判明し、驚かせてくれた。

事情を聞いてみると、帰省した三泊四日の間、夜通し父の仕事を手伝ってきたという。お正月らしさや、のんびり父とつき合いを楽しんできた訳ではない。だから、ほんの少しでも楽しい時間が欲しかったのだろう。

帰省したんだから、きっと甘えて楽しんできただろうという我々が持ちがちな先入観は、彼らを非行や反社会的な行動の入り口まで連れていってしまうのである。そこで、甘い誘惑の匂いをかいでしまうと、なかなか後戻りが出来ない。

小学六年生を超える頃になると、自我も相当育ち、辺りがよく見えはじめ、思春期特有の不安定で敏感な季節になる。

小学生の半ばから高学年にかけての子どもたちに、帰省から戻った後の三週間ほどの間に夜尿がよく見られ、人のおやつをとったり、置いてあったおつりなどをくすねてしまうなどがよく見られる。

だから親元への帰省はマイナスだから止めたらいいじゃないか、というのは短絡なのだ。

その様な父やあるいは母たちの生活の実際の中で、自分の置かれている様々な意味での状況を識り、たくさんの満たされない思いなどに自らを含めた家族としての位置を見つけ、その家族が持つ広い意味での情緒を共有して来るのである。

一般に養護施設の子どもたちは自分の家族に対してあらゆる意味で寛容である。

中にはまれに、「あんなのは親でもないし自分は子どもではない!」などと強烈に拒否する者もいるが、それさえも、〈そんな親であって欲しくないんだよ〜〉という悲痛な叫びであり、心からの願いの表現なのである。

そして、それでも彼らは〈帰る場所〉がある、という誇らしさを生きるバネにしている。

日誌抄

九月一日～十月末日まで

九月一日　二学期始まる。
七日　川口市吉田孝子氏より「子ども世界」を今月も。
十二日　町内琴寄の鈴木幸雄氏より取れたての新米を。感謝。
十三日　設立準備の頃からお世話になり最初の数年間を、軽井沢の夏休みのプレゼントなど力強いお励ましをいただいた渋沢多歌子氏の忌日を修す会が東京京王プラザで。菅原が参じ弔意を表し往事を偲ぶ。
十四日　死線をさまよい続けた竹花暁理事、名医たちの努力で手術が成功、多くの方々のお励ましと祈りにより回復へ。
十六日　高三の悟、就職試験。
十九日　悟就職内定。バンザイ。
二十日　小学校運動会。子どもたちの汗と笑顔とエネルギー。
二一日　越谷市福祉課より二名が見学に。
二三日　栖賀兄妹の父の没後一周年記念式を東大宮教会で。たくさんの方々の参列をいただいて。しめやかに。
二五日　岩槻教会高校生・青年会来訪して子どもたちと。
○大塚勇四郎氏より室内ブランコをいただく。ありがとう！。
○菅野クリニック院長菅野先生と看護婦長来訪。児童精神医の立場からのスーパーヴァイズと数名の子どもの診察を。
二九日　国際的レストランチェーンに就職予定の悟。お店をあげてご支援の栗橋町の割烹『萬屋』さんのご厚意で、この日から実習を週二回。
十月一日　中学校体育祭。
○関東商事よりいつものお励まし。ありがとうございます。
二日　地区運動会。中村調理師、神田幸枝・鈴木由紀子保母が健脚と美しい汗を。
五日　数年前より学習指導など熱いご支援の田中博正先生よりおいしいお菓子が。多謝。
六日　田圃を貸して下さり田植えや稲刈りなどご指導体験させて下さる坂田民次氏より収穫したキラキラの新米が届く。
八日　フェリス女学院よりヴォランティアに三名。一泊二日の草取り。笑顔と汗の美。
十一日　宮城教育大学花島政三郎氏、埼玉学園小林英義氏来訪して見学と交歓。
十二日　安田貴史郡市陸上羽生大会八百m走で一位。県大会出場へ。ヤッタネ！。
十四日　光の子どもの家後援会・赤十字奉仕団合同の草取りご奉仕。きれいになりました。
十六日　日本キリスト教団西千葉教会国井国長氏より子どもたちに良書を、と、図書券を。
二十日　熱烈ご支援を設立準備の時から続けられる梅沢三保氏よりお米をたくさん。感謝。
二三日　町内旗井戸笈千代美氏より衣類を。ありがとう。
○大利根町愛の基金友の会よりお米とお支えを。ありがとう。
二四日　江森ヘアーサロンより調髪のご奉仕。先代の時からご家族揃って、毎月。
二九日　愛の泉有志が訪問。お励ましとお花を沢山。（くら）

一九九五年度も基準外職員の確保のためにバザーを行います。不要品などのご協力をよろしくお願いします。
送り先は光の子どもの家気付。
バザー実行委員会

反射光

☆謹賀新年。二十一世紀の後姿が見えそうな新しい年をみんな揃って迎えました☆いよいよ私たちの家から社会へ子どもを送り出す年が始まりました。沢山甘え、反抗し、そして沢山の経験を残して彼らは出かけます☆自分の時間を豊かに過ごすことの下手な彼らが、仕事を終えた後の沢山の『自由』な時を持て余し、よその道へそれて行きはしないだろうか☆今更ながら一回限りの時の素早さを感じています☆バカなことをした時に子どもたちは決まって誰かの、環境やある時は社会のせいにしたりします☆それは、子どもだけでなく、大人でも、鍋を焼き焦がし、いつでも私がこれを作るときはこうなってしまうんだから！、と本気で怒っているのに出くわしすことも。焦がされた材料や鍋はいい迷惑です☆そうならないよう残り少ない生活のなかで、確実に自分に責任を持つことの意味や対応の仕方を、後回しに出来ないこの時を無駄にせず伝えなければ、と思いを新たにします。（哲）